

田口弘詩集

田口 弘詩集

頒価 1000円

(送料 200円)

1973年3月18日印刷
1973年4月1日発行

印刷 廣濟堂印刷株式会社

発行 風土社

埼玉県東松山市松葉町1-9-26

TEL 04932(2)1957

振替東京168303番

序

私は現在、詩を書いてないし、詩壇に何のかわりもない者であるから、『田口弘詩集』の序を書くのは本当は適當ではないのだが、この詩集の世に出ることを最も熱心に待っていた一人であり、また、田口弘君とは三十数年にわたって詩を中心としてつき合って来た間がらでもあるから、少しばかり追懷を語って、喜びの情を述べたいと思う。

昭和十年の秋、私は埼玉県松山中学校に国語の教師として赴任した。二十七歳で、まだ独身であった。田口弘君は、その時、松山中学校の生徒であつて、私たちは教室で相識つたのである。そのうち、田口君は土曜日の夜など、詩や文章を携えて私の所へ訪ねて来るようになった。私たちは教師と生徒には違いなかったが、私はまだ若かつたし、文学青年でもあつたから、友達どうしのように萩原朔太郎・高村光太郎・片山敏彦らの詩について語り合い、保田与重郎の文章をめぐって意見をたかかわせたりして、倦むことを知らなかった。田口君の書いて来たものをその場で読んで批評し、当時、私の書いていた詩を田口君に読んで聞かせたこともあつたと思う。いま思い出しても楽しい、幸福な夜であつた。

昭和十五年に田口君は東京の大泉師範に入学し、私は松山に残つた。帰省して私の所へ訪ねて来る田口君は、しばしば先生の五味保義氏の話をするようになった。翌昭和十六年、私も東京へ出て聖学

院中学校に勤めたが、田口君の縁で五味保義氏と会うようになった。田口君と一緒に千駄木の高村光太郎先生を訪ねたこともあった。

昭和十九年、田口君は海軍に属して慌しくジャワへ渡った。私は家族を疎開させて、独り東京に残り、生徒と共に空襲下の工場へ毎日通った。お互の生死もわからぬ期間がしばらく続いたが、昭和二十一年六月、辛苦して日本へ帰って来た田口君は、さっそく当時浜松にいた私の所へ訪ねて来てくれた。生きて再会したあの時の喜びは忘れがたい。

昭和二十二年に私は名古屋に移り住み、現在に到っているが、田口君は名古屋へも何度も訪ねて来てくれた。その頃、田口君は日教組の役員として精力的に働いていて、私のところへ寄るのもその大会の往きとか帰りとかが多かった。私は田口君の説明を聞いているうちに、次第に日教組の仕事の趣味が解って来て、それを支持する方向に傾いた。

去年（昭和四十七年）の十月、熊谷図書館で田口君の収集した高村光太郎関係の資料展が催されることを知って、私はそれを見に行った。その前夜、田口君の家で一泊し、ひさ夫人および成人した三人の子供さんたちにも会い、くつろいで遅くまで歓談した。あの夜もまことに楽しい夜であった。

つい筆が走って、序文らしからぬ、冗漫な文章になった。お許しを願いたい。

田口弘君の詩が現在の詩壇でどのような位置を占めているか、そういう事は私には解らない。ただ、私は三十年来の田口君の詩の読者の一人として、この詩集の刊行を心から喜ぶのである。この詩集は、

主として松山の生活、その山や林や川などの風物、および家族や友人知人とのさまざまな関わりをうたつた部分、戦争中の体験をうたつた「ジャワ詩抄」、日教組の役員としての厳しい生活の中から歌い上げた詩、そういう三つの部分から成っている。松山を中心とした日常の生活の詩が量的にも一番多いが、それらの詩篇は、実にじかに読者の心に触れて来る。キメが細かく、一途で、すがすがしい。爽やかな風に吹かれたように、心が洗われる思いがする。詩を書くということの意味が読者によく解つて来る。

「ジャワ詩抄」は、不思議に澄んで、美しい。あの激しい戦争の動乱のただ中から生れて来たとは思えぬほどである。田口君は、日々、死と直面し、それゆえに生の一切の形が明瞭に、正確に見えていたのであろう。田口君が南海の島々にいたのは、二十二歳から二十四歳までであり、これらの詩篇にはまぎれもなく田口君の青春の刻印が捺^{おさ}されている。

日教組の中での闘争の詩は、以上の二つのグループの詩とくらべて、著しく違っているように見えるが、詩の根元は全く同じである。これらの詩が機関誌に載せられ、会合の席上で朗読された時、仲間の人たちの心をどのように動かしたか、それを私は組合の人たちに聞いて見たい気がする。

田口君は、今、埼玉県の労働金庫という所で働いている。労働金庫の説明を私は詳しく聞いたのだが、私の理解は一向に進まず、今も霞をへだてたようにおぼろである。それはどうでもいいが、私の願うところは、田口君の内なる「詩」のいよいよ健やかであるように、ということである。『田口弘

詩集』の上梓がその事のためにも役立ち、近い将来に、第二詩集、第三詩集が出版されることを切に望むものである。

昭和四十八年二月

名古屋にて
柳田 知常

濕

原



S13.8.16 尾瀬<兄写す>

〈濕 原〉

1922（大11）3月 埼玉県東松山市（現在）に生れる。

30（昭5）〈8歳〉 7月姉静死ぬ（20歳）8月妹文子生れ、母死ぬ
（40歳）

36（昭11）〈14〉 埼玉県松山中学校2年生より柳田知常先生に師
事現在にいたる。

38（昭13）〈16〉 詩誌『四季』に投稿。

39（昭14）〈17〉 松山聖ルカ教会で洗礼を受ける。

40（昭15）〈18〉 東京・大泉師範学校に入り五味保義先生の教え
を受ける。

42（昭17）〈20〉 柳田先生とともに始めて高村光太郎先生にあ
う。卒論「高村光太郎研究」を持参する。

43（昭18）〈21〉 東京・志村第3国民学校教員となる。

44（昭19）〈22〉 文部省日本語派遣教員に志願。海軍教員として
マニラに向う。

少年期拾遺

神話

みすばらしい人の世に降り立った鴉は、
むなしい感情をいだいて
西の空にとび去った。

みすばらしい人の世に降り立った鶴は、
ほこりだらけになった衣裳をまとったまま
川のなかで死んだ。

世の人々は誰も知らなかった。
これらの美しい思想は
やがて神話となって昇天した。

馬

ぎしぎしとくい込んでくる闇がある。
鉛の重量が頭のうえに負いかぶさり
闇はすきまなく迫ってくる！

無感覚な泥のうえに

雨は沛然とたたきつけられ

時折 青白い刃が大胆に鉛をけずる。

つきあたり つきあたり

烈しく戦いきらめいている稲妻。

ああ びしょ濡れになつて馬がゆく！

瘦せた背骨から立ちのぼる水蒸気が

するどい光芒をすかしてありありと見える。

馬はあたたかに生きている。

馬は悲愴な感情をぎっしりとだいて

ああ 朦朧と北へ向つてゆく。

無題

どうしようかなあ

こんなことを思いながら

夜道を歩いているのはキケンだ。

おまけに神話のままの満月が出ている。

だがどうしようかなあ

白い夜道が沼をめぐっている。

曇天

りょうらんたる桃色の列と化するであろう桜。

桜はりょうらんなる桃色の列と化するであろうかの日。

だが朗かな天候は梢にまつわりつこうともせず。

鯉は無性に雨をのんでいる。

吹 上

亀が蠅をのむ。

苦い顔をして眼をつむる。

亀は迷いをひらいたかのように

ぼんやりと水に浮ぶ。

思い出したかのように

わずかな吹上の水で

長閑に頭を慰めている。

濕 原

越えていこう こえていこう

あおい山脈は 透明な山脈は

近よってこない たぐつても たぐつても

越えていこう！ 優しい野辺を

越えていこう！ 白樺の光っている この濕原を

小さな いくつもの沼が 白雲の下にある

あ、越えていこう！ 越えなければならないのだ

水芭蕉の葉が 揺れている

水にうるんだ 清純な微風そよかぜに

しろい光りは いっぱいに溢れるであろう

この 静かな濕原に

あ、いつの日 ひらくであろう！

白い花々は 純粋な花々は

この 美しい 濕原に 溢れるであろうか？

越えていこう　こえていこう

小さな手を　振りながら

あゝ　ぼくへの合図のために

振りながら　振りながら……………。

海のこと

六月のひかりの下に 嫩葉の並木がつづき

明瞭な縞模様の下に 馬車が走っている

白い道の片側には 間もなく海に入る川が流れ

ぼくはピカピカ砂浜に輝いている いろいろな 貝殻の光りを 憶つてみたりしていた

すべては透明な色彩に あふれ

ぼくたちの歌は 新しかった 明るい愛情にぬれていた

姉ちゃん 海まだ！

ぼくは 足ぶみしながら シャツポのつばを握っていた

お母さん ずいぶん遠いんだね！

ぼくは いっぱいだった………

青い笛をふいているような 形のいい松の並木を走りはじめた頃

ちいさく 水平線にちかい沖に浮んでいる いくつもの軍艦をみたとき

ぼくは思わず ばんざいしちゃった

ゼラチンでぬったような ふじが 麓の方を 空に溶けこませていて………

お母さん！ 姉さん！ 海！

ぼくはばんざいばんざいした

かわいい 白のような 魚の骨

七色の貝殻

ぼーと 明るんで いま 眸をいっぱいにさせます

お母さん！ 姉さん！

あ、ウミ！